

じょうこうじ

掟光寺だより

令和6年
12月号

お寺の行事案内

●12月9日 (月)
「宗祖報恩講」

●12月23日 (月)
「お焚き上げ」

●12月31日 (日)
「除夜の鐘」

23時45分



なぜ煩惱は百八つなのか

早いものでもうすぐ除夜の鐘がお耳に届く季節となりました。鐘をつく回数には百八つ、これは煩惱の数であると言われます。普段お寺と関わりのない方でもよく知られていますね。では、なぜ百八つ

なのでしょうか？

そもそも煩惱についてですが、煩惱とは身体を煩わせ心を悩ます心です。つまり、善くないところで、自分にとって離しがたい、捨てがたい感情、愛着や執着を指します。例えば、他の人を見て「うらやましい」と思ったり、あるいは「自分はえらいんだ」と思ってしまったたりする心です。この煩惱を細かく分けていくと百八つあるというわけです。その中の2つを紹介いたします。

①六根(6つの感覚器官)

一つ目は六根という仏教の感覚器官から計算する方法です。仏教では煩惱の原因はこの六根、つまり「眼・耳・鼻・舌・身・意」にあります。眼で色を、耳で声を、鼻で香りを、舌で味を、身で感覚を受けとるわけです。それぞれが受けとることによって感情が作用し、執着が生まれ、煩惱となると仏教では考えます。この「6」と

いう数字を覚えておいてください。

次にその六根の一つ一つが対象に出合うことで作用が始まり、「好き・きらい・どうでもいい」の3つの感情が生まれます。

例えば、眼が花を見ると色を感じて、「きれいな花だ。この花が好き」となったり、「あまり好きじゃない、花を見てもどうとも感じない」などの思いになるということです。つまり六根に対してそれぞれ、6種類の感情が生じますから、6(六根)×3(三種で十人の煩惱という)こととなります。

次に「好きなことに接すれば楽しく」なったり、「嫌なものであつたら苦しく」なったり、「どうでもいなら苦でもなく楽でもない」感情が生まれます。これらが六根にそれぞれ生じるわけですから18の煩惱となり、さっきの18と合わせて36になるわけです。

最後に、この36の煩惱が、「過去・現在・未来世」(三世)にわたって生じるという考えから、36×3(三世)で108、百八つの煩惱となるわけです。



②お経に書いてある

「俱舎論」というお経に書いてあるという説。九十八随眠(煩惱)と十纏(随煩惱)を合計した数が百八になるというものです。

随眠とは、貧(むさぼり)・瞋(いかり)・痴(おろか)の三毒に始まり、慢(おごり)、疑(うたがひ)、見(あやまった見方)などです。これらがさらに分類されて98となります。

- ・無慚(自分に恥じる心がない)
- ・無愧(他人に恥じる心がない)
- ・悪作(後悔)
- ・睡眠(心をあまいにし視野を狭める) こと
- ・掉挙(たかぶって落ち着かない)
- ・昏沈(気分が沈みこむこと)
- ・忿(短気なこころのこと)
- ・覆(自分の失敗を隠すこと)
- ・嫉(他人の幸せを喜ばないこと)
- ・慳(ケチでおしむこと)

この10を合わせて百八つになるということですが。

以上、なかなか難しかったと思いますが、要はそれだけ「たくさん」の煩惱があるということなんです。煩惱とは人間のこころの「クセ」のようなものです。クセを理解し、上手に付き合うことが心が安らくなる悟りの近道です。